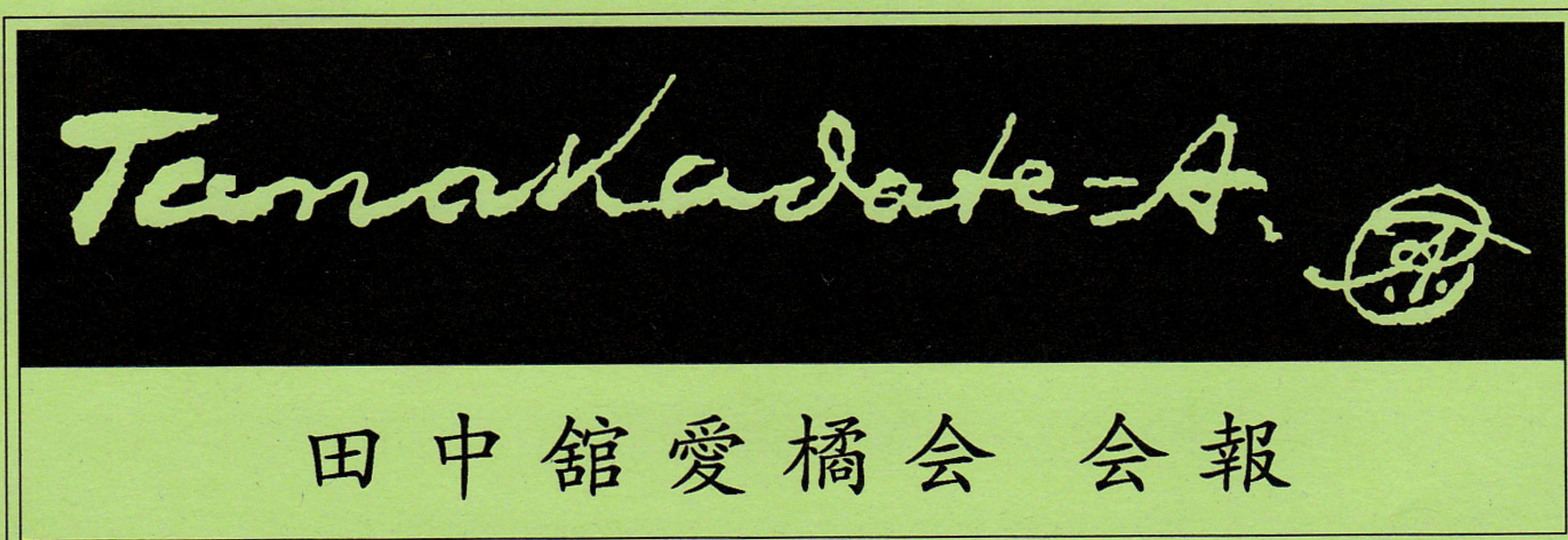




田中舘愛橘会 会報

化石の寝言 (3)

東大名誉教授 田中舘 愛 橘

6. 富の元

こう考えてくると、富というものが何であるかも分かってこよう。富とは、単に金とか地面とか、着物とか食べ物等ではない。これらはやがて失われる。地面だって地震で沈没すればゼロになる。これらはつまり、心の満足を得るための手蔓に過ぎない。

しからば名誉か権力かと言え、名誉は求めれば求めるほど不名誉になり、権力は得れば得るほど責任がかさばって苦労が増える。富の元は心にある。誰でも心に満足使用と努めているのをみて、富を求めていると思うのである。この満足を多くのものと共にするのが本当の富である。そして、この事実を実現するのが文化である。

文化は文芸美術に限らず、全ての社会の職業にわたって、何でも人間に満足を与えるものが文化だ。飛騨の甚五郎が幾日もかかってまっ平らに削り上げた一枚の板も、ゲーテが40年もかかって仕上げた幾十枚の「ファースト」も、これを使い、見る者に真の満足を与えようとしたもので、これで金を儲けようの名誉を得ようと考えたのではあるまい。

事業家が、ある企てを立て、良い仕事を興し、自分も社会もその利益に満足するのも全く同じことである。人間の満足のうち、最も大きなものは「新しい知識を得る」ことであろう。何事に限らず、今まで知られなかったことが分かることの嬉しさであろう。新聞雑誌は数え切れないほどあるのに、その売れ行きがやまないのを見ても分かる。

ラジュームの発見者キューリー夫婦は雨漏りのするバラックの中で、手細工の器械を使って長い間研究し、元の材料の200万分の一しかないラジュームを取り出した時の喜びは想像以上だったろう。或るアメリカ人が手紙でラジュームを取り出す方法を聞いた。キューリーは早速、それを詳しく書いて、発明権や特許権など塵ほども言わずに送ってやった。金儲けを目当てに研究したのではなかったから、損なことに頓着しなかったのだ。これでアメリカでもラジュームが出来るようになり、後にキューリー夫妻を招いて心尽くしのもてなしをし、また多量のラジュームを贈って礼をした。こういう魂の取引には約束だの権利だのという邪魔者は姿を消してしまう。

ニュートンの微分積分の発明など、その広い応用の権利をみたら莫大なものだろう。しかし、彼は学会への会費が払えなくて。退会を申し出ていたと言われている。

7. わが健康のなり来り

健康について度々ひとから聞かれるが、別に採り立てて言うほどのものはない。人並みにカゼもひけば腹下りもし、神経衰弱も腎臓病もした。年とってリウマチもやった。卒倒して人事不省になったことも3度ある。だから、これから言うことは養生法といって人に薦めるものではない。中にはまるで反対のことをしていたかも知れない。ただ、今まで90数年生きてきた。私の幼少からの健康のなり来りを語って、物好きな人の参考に供する迄のことである。

私は、安政3年、東北の南部藩の貧しい田舎武士の家に生まれた。その時、父は18才、母は16才だったそうだ。当時の言い伝えでは、両親とも20前に生まれた子は、達者で飛脚にもっとも良いと言われていたようだ。その地方では、子供を丈夫にすると行って、夏に夕立がくると、やっと歩きまわれる子にスゲ笠をかぶせて「尻からげ」させ、雨の中をざぶざぶと暴れさせたものだ。

5才頃から家で手習いを始め、6、7才から武芸をやった。これは実用流という、当時形式に流れた弊害を改めようと、平山行蔵という人が開いた各種の武芸を総括したもので、北海の国防を目先に置いたものだった。平山から下斗米大作、大作から私の曾祖父の栄八に伝えたから自然にこの気風を仕込まれた。

毎朝顔を洗うに、いかに寒い日でも水を使って、湯は決して使わせない。父や叔父は朝晩に木太刀打ちを100か200する。槍の突きもやる。それを見習って小さな木太刀でやった。やや長じて大人の使うのでやると5、60位でフラフラする。大人のやるのはいつまでも風切り音がしてしっかりしている。早くああやれるようになりたいと思った。9才の時手習いの弟子入りをした。この先生も大作の直弟子だったから、相弟子と共に庭前でハダシになって実用流の型をならい、それを練習した。この先生は時に、全くだしぬけに、型にある打ち込みをしかける。それに対して型にある受け方をしないで倒されたりすると「何のために稽古する」とたしなめられ「どんな時でも100万の敵が目の前にいると思え」と教えられた。(今日と雖も幾多内外の突発事件がそれだ)

座布団に座るのなどは60以上の老人か病人でなければ許さぬ建前だった。遊びとしては、夏は川へ、秋は山へ、冬になって雪が降れば、裾を高くまくり上げハダシで歩いたり、草履の裏に竹を付けてスケートをやった。11、2才になると馬に乗る稽古をした。

私の肺を強めたと思われるものに笛がある。笛の他にくるみ貝というのでも鳴らした。くるみの木の皮を螺旋形に剥ぎ取って円錐形に巻いて吹く。なかなか力があるが、長く続けるのが自慢で懸命にやった。

食い物は、通常稗飯か栗飯で、米は幾分か混ぜるだけで、全くの米の飯は正月と五節句以外に特別な客のある時だけだ。お菜は大根の葉をうでて干したホシナというものを味噌汁に入れたものと大根やキュウリの漬物だ。その他野菜は屋敷内で作ったものを食べた。魚は月に3度位に過ぎなかった。

明治1、2年頃、東北は飢饉に見舞われ、稗をその粉槽と一緒に搗き碎いたのを粥に炊いたのが主食で、蕨の根から澱粉をとって餅にしたのも食ったが、食べ物にかれこれ言うのは、武士の恥と教わっていたから、別になんとも思わず、戦場にいるような気持で暮らしたものだ。

——以下次号へ——

ROMAZI SINBUN (ローマ字新聞) から ROMAZI-SEKAI (ローマ字世界) へ

——雑誌「ローマ字世界」から——

博士が長年すすめられてきた「日本式綴り方」のローマ字運動がいよいよ高まり、明治43年6月5日、日本式綴りで「ローマ字新聞」第1号発行された。毎月2回発行で26号まで続いた。

明治44年7月からは「ローマ字世界」と名前を替え月刊雑誌として発行された。これには、博士の論文が多く載っている。論文の多くは航空機やローマ字に関するものであるが、飛行機の速さや高さのこと、空気の渦などという難しい理論でも、博士独特の小咄風の語り口で書かれ、分かり易く楽しく読めるから不思議である。

この雑誌は「日本のローマ字社」の発行であるが、昭和26年の41の巻まで、博士はその時その時の問題、話題を載せている。(これまでの会報で時折紹介してきた随想・小論文もこれから引用したものが多い)



賛助員として学者・名士が名を連ねているが(30名余)知名の方々を拾い挙げてみると

※次の項の一方または両方に当たる人を賛助員とする

1. 本社の事業を賛成する知名の人出、本社から賛助員足ることをお願いした人
2. 本社の事業を助けるために一時金50円以上または毎年5円以上を出金する人(※印のあるのは本社の費用補助のため出金の方)

領 事	相 羽 恒 次	文学博士	後藤朝太郎
理学博士	本多光太郎	理 学 士	藤 原 咲 平
文部次官	福原輻二郎	東北大総長	北 条 時 敬
文学博士	金田一京助	理学博士	菊 池 大 麓
医 学 士	三 田 定 則	工学博士	大河内正敏
法学博士	新渡戸稲造	文学博士	新 村 出
理学博士	田 中 正 平	文学博士	上 田 萬 年
陸軍少将	伊 部 直 光	東大総長	山川健次郎
理学博士	寺 田 寅 彦	理学博士	中 村 精 男
法学博士	加 藤 弘 之		

(相談役) 理学博士 田中館愛橘

理学博士 芳賀矢一

(事務指図役) 理学博士 田丸卓郎

※定価は一部郵税共8銭、一年分前金で90銭とある。

第 49 回 田中館博士記念 児童生徒科学研究発表会 終わる

恒例の標記研究発表会が、去る 2 月 8 日、二戸市シビックセンターを主会場にして開催されました。参加の児童生徒達は、主として冬休み中の研究を主にまとめたものを携え、10 分間の発表に取り組みました。(入賞者 = 最→最優秀賞 優→優秀賞)

最一小 1 年	かたつむりのかんさつ 夏と冬	(福岡小) 志賀 優
優一小 2 年	こおりのとけるはやさ・こおるはやさ	(福岡小) 四戸 理稀
優一小 3 年	コウジができるまで	(福岡小) 久慈 太陽
優一小 3 年	じ石の力	(一戸小) 一井 成
最一小 4 年	プランター菜園 成長の違い調べ	(一戸小) 山火萌乃佳
優一小 4 年	重そうの実験	(一戸小) 坂本 芽
優一小 5 年	ベニ花の観察と実験	(一戸小) 田村 美音
優一小 5 年	室内温度の工夫で Eco.	(金田一小) 岩崎 洸
優一小 5 年	地震の研究	(福岡小) 荒谷伊武樹
最一小 6 年	身近な水溶液の性質	(一戸小) 永田峰奈子
優一小 6 年	「さび」ができやすい環境とは	(福岡小) 十文字陽亮
優一中学生	干しりんごの研究 (2)	(福岡中) 日向宥敬 高橋涼太 目時靖幸

その後の歩み

平成23年9月13日 ※「第3回ローマ字書道コンクール」作品展示
——シビックセンター市民ホール (31日迄) ——
平成24年2月8日 第49回田中館博士記念児童生徒科学研究発表会後援

~~~~~あ と が き~~~~~

*「年に一度」と言われた東日本大震災の年も終わり、新しい年を迎えたと思ったらもう 2 月とは相成っておりました。いつもの事乍らコヨミのめくれかたが早いように思われてならないのは私だけでしょうか。それにしても、復興の足音は年を越してもガレキが問題ナノは意外な気もしますが、確実に進んでいることと信じております。

*本年は田中館博士の「没後60年祭」に当たります。会としても、記念事業として「墓前祭」と「記念講演会」のような事を実施したいものと目論んでおりますので、その節には会員の方々にも宜しくお願い申し上げます。

*訃報です。

故 吉田省三氏 (11月) ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

《会報のタイトルについて》

*写真は昭和 19 年 4 月、文化勲章受章の時のものです。

*氏名、サインとも博士の自筆であり、サインは絵やローマ字の書き物をなされた時に主として記しており、両方とも印鑑にしているものもあります。

《会報の発行について》

*年 2 回発行 *編集者 佐藤綾夫 (事務局長)

《発行所》 田 中 館 愛 橘 会

〒028-6103 岩手県二戸市石切所字荷渡55

二戸市シビックセンター内 ☎0195-25-5411

F 0195-23-3548

(振替口座) 02350-8-18841

《印刷所》 沢 倉 印 刷 株 式 会 社

〒028-6101 岩手県二戸市福岡字城ノ外38 ☎0195-23-3107